婦人孝經

江戸花誌

利

番號 174
冊數 八
京華石河光治藏

へ13
2916
3

へは
2916
3
特

昭和九年
八月六日
購求

婦人孝経

江戸花誌巻三

藏書之記
いちかは
みつえる

すぐさのまち

花よりも供あるものをぶ拵ものを座敷と
待ぞたるものは是法外いと考えるのりという
ものを待る者ありけら〳〵新て考待象ようの
花笠一軒が記録引とうの行人小石川村
ある風呂屋町〳〵建むきてーぶまたかのる移ふ

夜文て芝浦の風形く立す戻りいぎわの立
ける男の一学が死髪を結とうとして小石川
村へ死り載ると足元はけ少ぶ今一人女の
死髪傷ふとまてありその面体容貌分明
あき楽ぶ妻茅ぶ死髪よゆまゝその侵ちち
捨ぶ亜ぶくその後又分の殺人元へあふとり
是又一緒ふ引とう立場ゆ中ゆ勿論表とある
言女と中若ふ子綱を舞稼ゆ伝ぶ茅ぶ郊よ

同乃の男あつて二三日いぶんふ彼ふの伝ぶ多く
引稼ゆよゝその同乃彼せゝ男ハ発動
ふ紛ぶ多を浪ゝ行方知ずありゆうふ
果てあ人の横死も彼男の仕業あるべと
中ゆあゆぶ移又その男の手拾好うけ
あつゆぶ山ゝ中亜義を出委結せ梅木
香門ふ相遠られあく結ふあ人ぶ死髪の傷
ふ脱すてあり血ゝふ深ゝ表狼ようれが

定紋なる一輪梅の紋付あれバこそ猶も
なき香門が仕業うト存じられけるゆへ
申立られバ刑部大夫どのゝも其ゆへあつて係る
糺の混雑あるらん只寛めて香門が仕業ゟ相
違もあるまじ是倭しながら斬意気を含
める婚果渭是なきふしもあるべからバ其みなよ
びさるすぞもあらバ包まずや申のべし卜其倒
不相法なる面々へ同宅の者が周付ケ役勉むる

与風無きたるどりふ君生き出てゆかるゝ道
其家中峯ッて香門卜一学が妻落卜密通
致せしよし風聞うけまりけるへ其員代をも
相勉むる私しるすきろそくも上ケてきびしく
其糺方をも業らすべき不在れども余り厚し
からねるゆを其耳ふへときるも恐れ多くおそふ
其家の其名までも出んるゆを憚りなきり方の
若き香門がるゆへ届三内ふゆて其主へ

をも加へゆくとも兎角ふおもひ少べき極まも
うれあく偏くふ招義ふ對〜まり心配大方
あぐぐろ和すぐふ香門茶ハ西蛮菓を出奏
住りハ百氏腹ヤ上ケもの刻〜一学ふう妻茅
る親新ども方〜這菓ふ考ハせ〜ふ布み
ヤもみいぐとハ存ぐゆくど正〜く一学うこ
ふう表むきヤ立ゆうくハふものやおまもある
まぐ知るトぐんぐ考れくあり年りゆさまれば

香門る一学ゲ妻茅を誘引逐て〜て
風ん茅町ふ身を要び居ろと一学まあくも
足重けて付果さんト推考ふ〜却〜あ
歩ふ重〜ものトろくゆ又茅ゲ背中ふうみ
ろる病ハまろさく一学ゲ貢せ〜ふ題ひ
あるべらず新ふ貢とまりものれゲ飛ふ風
ゆく自害せ〜るトハ存ぐられゆくとさすゲ
月身役ハとむる猛あく〜利非明白ふのべ

くれば主君ゆも始めてそれをゆゆしくおもされ
佛らと経るきまひつゝ香門が手ゝのふる仕
とへやあぐら又一学さてもふ見情ゆ万の
そらひあうまゝ楽ぐ親新どもをもび
よも記嶺ゑ子ゆのうへ娘をもゝ引
香門と付羅漢式闘和中分べゝト君令
の重きふハット古清しゝ皆ゝ参を引
ようるされば一学ゆ宝ゝ娘かとうぐ

たゝひと　ち　く
兵衛ゝ父の涙ゝを結ゝびてゝ涙ゝ流れて
ゆゝ日山没頃ゆゝ戻る親さへ見
のたゝひとゝせんかゝやト案ゝゝ迎ひの人を
出さんゆも親新方へとだうゆて何方を能ゆ
出さべきト思案のゝちゆ日も暮ゝ夜よ入る
うへゝ尚ゆゝ古門の出入容易ゆ叶ずたゞ吾
家の門ゆ立ち出ゝ待ゝ案ゝゝ又内へ
入ゝ仏神棚へ灯を上げ仏前ゆ香を焚ぐ

父の無難を祈りつゝ又門に立て出て
行とゞれ涙に むせびぬ紡緋として居る所へ
級人さもに立て来る 釈の記録を戸板に乗
聖特来れに 京門のものに是に 斗り驚く
もちろんあるとうへ一ト貫又るようもちろん書て
父の記録ふとう携りコハ何と申と押動色
又母の記録に ものに 級で口説
たて 彼方を又 ものを 縁め 義 正 件

あるに沉む悲歎の涙に むせるに 理り責て
悲りあり 級人 記録 極 理 ト 彼を 縁て 今 日
小石川村 ある 風 人 茶 町 といふ 所 に 一 学 ぶの
撰 記 をとゞられ 懐 中 の 出 付 より 名 所
ふれて 彼 町 より 南 中 西 者 人 級 逗 国 て 集
仰 を 家 り 彼 西 人 記 聴 ふ 知 ま く 又 る に 今 一 人 の
記 録 ふ の 弁 が 母 の お 茶 ど の お 捨 て 盃
ぐ ら れ ば の 肩 に 合 の 級 人 尼 ん と ら て

一統ふしぎ〳〵来りしあり氏うくの古載洋
いづあるべ〳〵いづ是也上より西海法もあらん
まづ夫まづ家門一日慎〳〵居られョとの
るとの方仏るらるべ〳〵と始終のかうを人
〳〵知れどもあとうが敬きの疫サホ又まの
どくさを推量ま〳〵知らぬ都をとて後人い
ゆうる張ふあとうい祭ふ舞と差ふゆあうる
絶〳〵て今ふ身も絶ちんてふ敬き也〳〵

[illegible]れが家門の男女ちもあてきぬぐ〳〵ホ分
抱ま〳〵ともホ涙ホくまて居ることるホ又一号ぶ
母方の叔父ホ来ホ雷交といふ者あり西附
浪人あて月代絶町といふ者ホ信ふ家〳〵て
住居るが安〳〵張ふ家よりうく来りく
一号ぶが多ぶんホ付きまりて湯をぐきてホ泊られ
ある日兵人ら館へ乗り越ぐきとなく書ふ来
ホまりも雷炎も夜中をいひ大ホ騒きまあホ

るのあるやトそのものもとうあくぼそと〳〵ふな
〳〵て仮ひの者とうち連立ち屋を巻ぎ
ちまけ家不ふり車ゝ立〳〵の宅へ帰り
出くいきあ仕せ涙され〳〵新きと仮背を
さるもおのひ者ざるるゆくふんも用章
猫涙れまづいさ〳〵的ッて尚熱の途絶を
突て去れ〳〵ト一巻すがう方へあれがおとうい歌
きの家中ものをも的去ぬが家門の男

女一統ふ能ふ〳〵帯妙さる女の西出宝あてある
たゝ今日のゑ細を出ゆあきれ〳〵あらんぞよ
〳〵た仮で式ゆるゑ出〳〵ふるゆふあるうあきれ
ま〳〵チャット出ゆのせトさうませト皆〳〵騒を
泣猫〳〵ていひろるわぞ帯妙も涙ものぐらまづ
かろうを分抱〳〵てあるうれど表新ふ新れるゑ
〳〵ふゆとゆせんぞんすまじもうけのうりて
驚るき入るるゑの始末疾涙ふあゆんぐ

来りしも新の通りの古書数多あり
ぞやと人々の尋ねしに彼人の人と問答して彼人
元の宅へ帰り子細洋ふらみのふれば思ひ
ぞ付き紀是八さうとちらも
蔵他人のまくをも悔うらず時〻洲ふ通
るがよう〻人をとそ
ふみのうふかまるも梅木香門どのとそる
人と為てふ義密通の疑ひ家中一

統風伝あり八二日以来香門どの方へ
捕を出奏被されその刺客かへさく
追放ふ半〻せ〻部むき見付元まで帰ひ
しよう〻彼ふ今ゝ日小石川村ある風呂屋
所ふてふ虚ふ一男子捕紀ふあるび懐中乃
出ものよう考ふ為ふ象の藩中ゝ性ふ医
人なれば又分の役人元よりも医師へ
通達られあり又風呂屋弟所よりも注ん

ありける経は慈悲深くも一学が紀嶽を
しらずの為役人衆を書かされ不測ども
妻若が紀嶽も方にありければ捨置
がたくどて夫婦ならとも仕らし在下されし
よしさりながらるの始末家主喜ぶとも
そる老ふ名しく拳探られしに去三日に家
は名の男ありて彼恵へ引移りしるおもむき
その男といふは香川どのに違ひなき趣聞へ

紀嶽の傍に捨捨ありし衣彼に一輪梅の
紋付あれば疑ふべくもあらざるよし定めて
一学是を知つて付果さんと推参せし却て
返り討に逢しる明白なりト何某どのも
濃くのも仰せらるとぞ正しく敵の
仇敵は彼梅木香川なりト笑ふかよふれ
歎きもつまれ無念のなげき血だしる涙
幸ロおしん彼が立父さまの敵母さまの仇

ちゝみかのん
近年香門が首とうて脩羅の苦患をも
救ひまつらせんコレヲ叔父さゑちらを添て
対してまられト又も悲歎の涙川をもうく
をりうるに不る事分をていひ名人著
る香門と立退ることを思へ退散不幸世と
屋けし一男子が仏屋合点ゆゑず長方書
実不退散と却ひ香門やト皆〳〵不ん
れがあとうい涙を押へ文ふうを出ゆ〳〵あり

此母さゑの行事ゆえ香門さゑハ哉
場ふ知る人多くありて持参ども自ゆふ
貴ひ〳〵ふまふふよ〳〵なれば御ぶりヤテ久ん
物ふ多るべしとのるゆへ喜ふ好ふ西ん
い嬉〳〵くさうそく香門さゑへお稽ぶりヤ世
とろ西ふ人あるく父さゑの持参いうどの
ゆるゆへそれハ世〳〵も西ふ事ひ〳〵ふ
西紙業ヤ上ケ父さゑ〈新とヤ世ふ考くの

風俗よりも世俗にそういろふ智りて世ふ母の
体なりしを吾佛ぶ行さふ心うらを生とゆて
幸理者りふ行者比抑その美居見物世意
無ふあまるかふうら香門さ女ふ百まく礼を
いへ者りておゆるーあり し時ーきが却く出ーふ
るふありほさ者ふ母さ女ふ世見悟のうと
見人程よふ時分をえ海ーて用量ーふ者り
たうれど人ゆるれが一すえ送りてゆうれ世ト

香門さ女ー作せうれふ知りど世人ゆふ女中
なうりも心者ひとは乃て持義をいでうひ
しも性者ふえうれてんも付ず程ゆて世立
戻りあきゆふ著金ー人を者りて使せうれば
時方ーて世載あさうず使よりいふ〳〵常ど
られ今やくと行うちふ美居もうち出ー洛
方ふくー又著金ーいうて行ぶも〳〵世出ふく

作者いうく ふむ世の美居ふすぐく日の者ちぎうゆ世
ゆまひさうりりあり今の使ふ者ふのうるゆいうてます

そのうち夜中のうつれば門の出入もむづと
くと足根をかく案じ炬ひるがら立ぬてゐま
もれば父さまいと用事て他行の為ちゆ出掛
を待ちくていさわのやうまと告まくれば
父さまも驚きのび涙きて者ある少を必
らず世間へ沙汰いすなまの一事ある人あれば
二ゐる里へ逗留ゐまりしとさあるぬ体ゐ接拵
せよト家門のうへ口ゆ拵られ

今ハ考ようまく御見られを寒ろゐ
ゆのひて母さまゐる里へ逗留ゐ考せくゐ体ゐ
舎新くて一上世間の人の口ハ恐ぎくうどもゐ
義いさばらの罪その体ハ捨ぎくさる
あても吾一不分ゐ者ゐ者ゐ親新中百
一ト通りたゐくゐ様とも体合くて又能勢ゐ
をも偽ぎやトおりのあり夫も是も出ゐ者が
分のうへとふ仮ゐおりゐのうト宣ひく

朝食仕まつりやがて暇やさうゝふなるゝて
出行のひゝぶ今又おひまいぶもれど極めて
母さゑの場是居のゝ面をあろゝ也しうるふ
思ひずおぶゝもされ待をきんとの出見情
あて偖ハ出行のひゝらさうとれ知らぬとど
どのく虫ぶあらせる絢繰ぎ伺ニとやらんは名
殆おゝゝ又送る門辺ふ父さゑもやいや猟り
そん後ふりあゝ出行たまひゝ

三十二

面教ぶもき別まとあり付るうトるす洋うふ
物語れば雷外ゆゝてそれでこそ臣く極子
知れさるあり偖ゝるまの因縁うれあくれ
ども是非もあきるやぶもうまの係る非業ふ記
のゝあのぶ一学ぶふ学見悟のをらひ是也
平日家門ふを締より羊見いるす記まる
四外ふのふようく家行絶仰ぶすられ明日
中ふ出立をを引揃ハヤべくとの行せ波

さんあう夫ふ付けても兵ふ屋そのうへ其方の
身のうへ歎きの中の鶯きいたあわれ〜へくるる
なれとも立命あれば法方あり〜泉門の男
女もそのゝ捕ひ〜て病も明あべ給〜ふと
立退く用意なきまぐ〜と坐のようあとうへ牧
あふ歎きのうへの歎きさて是といふもこの
香門どのよう〜紀りしるゆとなるうも
会の涙あ〜き中〜ふ変て泉門の混雑へ

同も高らんず新ても男〜ふるれどとく
あへの乱髪をも涙あぐらふそ行ケ病も
明あべ高ぎ葬送を経常んと香花燒
用ふ向のふ弓仕ひの男女もうち寄りて
皆〜同向も美現繁ふ夫〜夫の病も
ちや横ふ近付ケば雷鳴入立出て葬送
の乱ぐ〜をとう涙へあへの己髪とおきあて
菩提夫へ送う最期牧ふ乱髪をいとあと

ける供家内の男女も扨ひ奇ざる災の
身ふるひてうるさと立退用意するれば婢女も
幾の毒ふ扨のひまく〳〵ふ百〳〵紀念ろみけ
しと悔ぞ出〳〵ろ皆〳〵も一夢ゞ日比の
情け涙うろれが兵管名残を惜〳〵つ涓
ちぐらふおとろト婢女ふ悔をして立去ろる
今八人安〳〵とて家内の弦道ろ〳〵おとろふ
集ち車を雇ひて積出〳〵残る和もあく

元汗身て右の後級人中〳〵相受けその日の
夕方岩〳〵清泉の至形を引ろろかろ
涙の之見るもあく表親ふ一時ふ敗れ又
そのうくふ山れ蔵ろう絶別〳〵面義ろも
別〳〵と扨めくいとど歩〳〵て歩〳〵かひろる
ひろ髪〳〵戻さ〳〵ふ兎して振ろろる
至形のくちあく〳〵出る吾家の名残豆
ひとさくもちどろあるを婢女さく〳〵財あく

よう〳〵月池の殘炮町〳〵徘徊して甚れ
あるきまわるに時るまで歩行家の古鎧ふ
住別〳〵の二ツふ自由さるるもあるりしが長
又ふ〳〵まる花ゆて表親ふ別まさ〳〵い叔父
さ母の伴ふ歩られて涙ふくるる命さを添め
哭明〳〵ふ死者〳〵兵管父の遊芸修業ふ
道るふねど母の手を振る吊ひて金行や
より外へ他るまるるる光陰さまざら撤

のどくちやちのさーも秋の中旬とありたが
さくるの慈是猶ふ歩〳〵きるるに待ふも他られ
ふるも流是ふるきふ母ふさくいとど淋〳〵きゆふ
ふるに筆ふ筆ふすぐ〳〵虫のまる〳〵ふる涙を
流るるも嫁ちまるるるのをいらんやおさうが
歩〳〵さに涙のかく〳〵増るるく母父母のる
のミいひまるて親きふ泣むをうるれが雷
女まふ取るふ投るるるすトさるぐ〳〵ふ法りつ

新しく病ひとなるらんと猶の外ふ案じ
いろ〳〵と心を法く慰むる中ゆも若き者とて
よ紀き情〳〵の面あり若ひ彩粧云乃
習ひ目まれば又和ふ彩ぐーと色を換て
動むれどもあらうん文〳〵その事もるく文
毋ふかくまつ〳〵せ〳〵も元やといくべ業者一彩
〳〵ようる紀り此男雑を引ふ〳〵ト却るべ
結るりのうく〳〵て今うんえるとも面白うくべト

下間のうちふ閑籠りて長雨〳〵と思ひ暮
せ〳〵余りふやいつの昔よりうき分も侍れず
日頃ふ癒労〳〵くちらるき嘆くのど出るふ
霄父夫の妻の日羅き安ふ〳〵ざさろそく近所の
賢者を頼ゝて慰るのどと白せ々れどもとうく
うち持〳〵次第〳〵ふ食事も細く連ち
鬱色憔悴〳〵て形容枯槁せるふあらゆる
古寿ヨ祈禱ヨと浪人のうきぶ中ふ物へる

驚ず爪抱ぬうらいあるれども爪いきくるも
弱〳〵ちうれべ仏配方あぐるおうら毒
妙製結糸の風評吹〳〵京橋南鴻馬町
いとり新屋ゑて坂本氏創法美艶仙女香
さいふ清新の業うり白粉を賣たゝう近所
やら円い面智恵の源舌ゑて法毒のまど
ちゑをするふ弟の外奇妙ふ能利その源
毒の西養ゑて手を毒を遁れ〳〵うの教を

知ふびと伝ゑよう毒妙い耳ようのるゑトよう
とびさうそく伝ゑを求ゑてあうう毒気の
まどちゑを嗅〳〵ゑれが考ふよう貧〳〵ら
ぎる舟上の源舌ゑて絶法ゑも拵ゑうび法
人の考とて絶すまどちゑれがいうゑくも
待ゑ法ゑ連来られよトあうれが毒妙文
婦も大ふ飾べいまづ先の家名まどゆのあら
まるふ円い面智を商賣ゑて白銀屋ぎん

十郎といふ者の傍らに居あるを見てしばらく物
その翌日おとうを誘ひ京ざくの華林坊
白雄金ふらりて案門をとひろるに傍
白翁さろそく立出て對面あるひは初
めその挨拶なく直ちに法式あらざ
ればとを求めて出まじきの筆相談ひまう
せ〜病人の別ち此娘ありとおとうを引合
まれば白翁一下通りの意まの容をを華ある

史女親ふ別まりく且等歌き出〜むりの
物のひさめぐ清ち厨ちてる兵持〜と涙ふ
沉ミ日ふ場 瘦裏新の色食手もる兵ず
ぶらく〜ト出 覚のさろ姫ひまする〜物語れば
白翁いらち悲ひ少〜も手ひ法の字
イザ出筆を出て手まぐ〜ト字の中(三字
の文字を出法〜上を墨ちて法兵ふ
妖ぶくふ法して供出墨を明朝ふ出ろれ

也洗ひおとし一トロふ呑せうく又今日の七日の
間は善男あぐら毎日伴ひ来れヨは肩
も甚だ〳〵新〳〵ふ出く上ケ中さんト名結ね
接拶ふ也吹も一ヶ礼述さあらべまう〳〵明日
来るべ〳〵トおとうを誘引なうろう

江戸花誌巻三終